

# 安齋隨筆

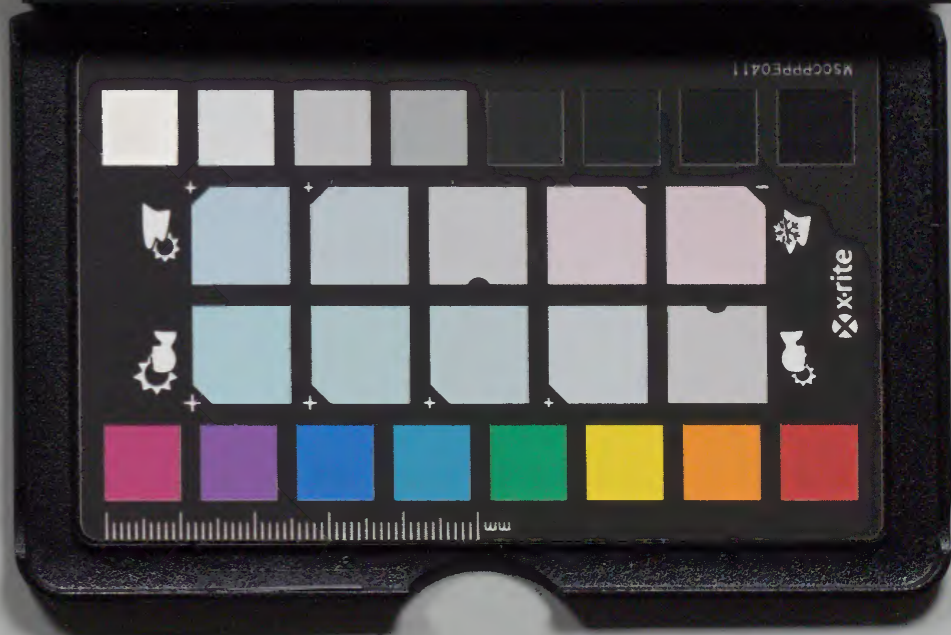
六

武藏館

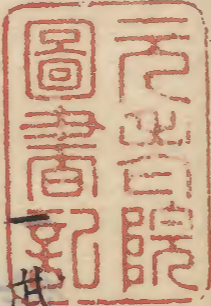
								和書門
			八	九	四	八		
		一	八	九				
		一	三					
		一	六					
		冊	架	函	號	類		

庫	文	閣	內	
五	八			和
三	九			書
函	四			
一	八			
九				
架	冊	號	類	

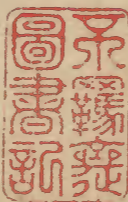
內閣文庫	
番號	和 8948
冊數	16 (6)
函號	153 294







武藏院圖書印



源平盛衰記等ニ見ヘタリ天明元年辛丑十二月四日

予古キ鉄鏡ヲ求ノ得タリ甚古クシテ地肌荒タリ鉄

色紫ニテ鍛甚堅シ全体ハ作ノ木鏡ニ似テ小形ニカ

クビアラノカズ大ニ反ラス鳩胸中少シ高シ大ニ

突出ス肩ヨリ桺葉ノ通り外ノ端ニキテウメテアリ

カハ佐ノ木掛ノ如シ無左右ニサスカノ出入ノ

穴ハヘウタン形ニスカシタリカコ頭ノ下ヨリ古先

ノ外稜ニテ五六ノ矩ニ分タリ惣躰無文ノ鉄地ニテ

内ハ朱ニテヌリカコ頭ノ正面ニ金沢ノ住ト銘アリ

今片方ノ鏡ニモ銘同シク金沢住トアリ金沢ハ武藏

國ノ地名ニ是古西謂武藏鏡ニ○加州金沢街ノ鏡アリ

リカコクビノ正面ニ加別金沢住ト銘アリテ象眼ヲ  
入タリ惣体ナニクノ文ヲ象眼ニシタリ全体大形ニ  
シテカコクビアヲノキ反リテ鳩胸ノ中大ニ突出チ  
見悪リシナスガ無左右ニ非ス武藏ノ金沢掛トハ大  
ニ違タリ

一 鎧威毛 鎧ノオトシケト云文字威毛ト各キ未レリ  
俗用ニハ是ニテモヨキ之本字ハオトスニハ縵ノ字  
ヲ用ヘシ玉篇ニ縵七林ノ切綫ニ詩魯頌ニ見曾朱縵  
ス以未綫綴具而飾曾也トアリ朱縵ハヒオトシノオ  
トシケノケハ系ヲ用ヘシ綫ハ思箭ノ切線ト同シ又  
系ノ字ナク縵ノ一字ニテモオトシゲトヨムヘシ  
一 侍大将足輕大将 大将ト云ハ総軍ノ主将ナリナレ

一 侍大将足輕大将トハ云フニシキ事ナレトモ右ノ  
如ク云ヒ習ハセリ侍隊長足輕隊長ト云フヘキコト  
ナリ

一 紫 玉篇云子甫ノ切色ニ字彙ニ黑赤ノ間色ニ按漢  
土ニハ黑赤交ル色ヲ紫ト云此方ニテ今云トビ色カ  
キ色ノ類ニ此方ニテムラサキト云ハ青赤交ル色ニ  
ムラサキニ紫ノ字ヲアテタルハ似タル故ニ色ヲ本  
ニシテ字ハ借ルニ此方ノムラサキト漢土ノ紫色ト  
ハ少違タレ共紫字ヲ借テ用ルニ或人字ヲ本ニテ此  
方ノムラサキヲモ黑赤間色ニト云ハ字ニ泥ミタル  
ニ万事万物和漢同モアリ異ナルモアリ異ナレ氏似  
タルヲアレハ漢字ヲ借テ推當テ用ルニ上古ヨリ云

傳へタル言語物ノ名等ハ本ニシテ文字ヲハ後ニ推  
當テ付タルニ推當ナル故少違タルトモアレ氏宥ノ  
テ用ルニ此方ノ事物ヲ云ニ文字ヲ本ニシテ云ハ腐  
儒ノ所為ニ

一いろは 麒麟抄云九卷才或書曰護命僧正イロハニホ  
ヘト午リ又ルヲ口カヨタシカフ子ナラムウ井ノオ  
ク弘法大師ヤケフコエテアサキユメニシ上ヒモ  
セス

一麒麟抄十卷同見聞上下二卷 大宮亮正四位下良經  
撰ト有時代筆道ノ書ニ指テ可取トナキ書ニ大宮亮  
大皇後亮十里

一 鐙名所 鐙ノ頭ノ輪ヲタカ頭トモタコ頭共云ハ皆

誤ニカコ頭ト云本ニ 鉸具頭ト書ニカコクビノ頭ト  
云トニ 鉸具ハサスガ共三ツヲガ子共云 鉸具ノ在ル  
処ノ頭ヲカコクビト云又三ツヲガ子ト云ヲビジコ  
カ子又ビトウカ子ト云誤リニ云ツヲカ子ト云ハニ  
ツヲ革ヘサスカ子ニ三ツヲ革トハチカラ革ノ穴ア  
キタルヲ云ニツトハ穴ノ裏ニ針ノ穴ヲレツト云ニ  
同シニツヲノヲハ緒ニ又サスカト云ハサスカ子ト  
云トニ子ヲ畧ルニ又鐙ノ端廻リヲアナイバト云ハ  
柙端ニ端ノ左右エ折レ曲リタル形ガレダレ柙ノ枝  
ノタハミタレタルニ似タレハニ又鐙ヲフニ十カラ  
馬ノ腹ニ鐙ヲアツルヲカクヲ入ルト云カリハ脚ノ  
字ニ



よのちの海きゆふかくのこころよめし是地右のむまこ  
えんむちちとむふし法海寺のむまこみたく小  
まわしつ

一古今集正本 細川玄音誦釈大概抄云後醍醐天皇  
中ノ奏覧の古々として正和と号す玉室天皇中  
とのまゝしる所は定案はむと定む時法書と取換して  
不考とらえてお束の束の流如と異之分明と之入  
二条家と名りんともつゝ八条極楽門 以先のむま  
屋事ふつゝうふあやと又之茶の撰若也之と撰  
て後の定案とすん束とさる若の偏執我滞かくの  
ゆゑ法海寺のむまこみたくしてハ正和寺建いしゆゆふ  
ゆゑか

一貞宗作ノ鞍 天明元年辛丑十二月廿二日得之也優美

永正五年四月三日トアリ又貞宗ノ花押アリ永正五  
年ハ義澄將軍近江国ニ出奔ノ年ニ永正五年ヨリ當  
年迄二百七十四年ヲ歴テ吾先祖ノ手作ノ鞍再ヒ吾  
家ニ返リタリ願宗行伊勢守入侍從都將軍ノ政所職ト  
号金仙寺後

一だふとま河とま河 だふとらへといひつゝる河とま河  
と考へ給へし物ふとせはだふとま河と制の河とありし  
だふの代りふとま河と申は古言よ違ひて誤りしだふは  
小の畧語ニ だふとま河と云ふは定案の比 唯の字又ハ帝  
の字ふまふしるハ河まの畧語也河とありしとありし  
こゝのめまうしてをいふと云とトサト吾お世にえんを刑







一 巾金ニの如く層金ハ鉛と入る某中ニの如く上ニ七分と吹  
抜ルの如く細金ニの如く又膏油とハ油と入る中ニの如く浪  
去ルの如く細金ハ細金ニの如くの如くハお前ニせや  
いふニの如く入る細金ニの如く

一 貞文聞金銀ニ銅鉛ヲ交タルヲ吹分ルニハ金銀ヲ  
火ニテ沸シ礪砂ヲ交テ銅ノ盤ニ流シカリレハ自  
ラ分ルト云

一 古語ニの如く彼女ノ如くハお前ニの如くハお前ニの如く  
書記ノの如く為ルの如くハ海方ノの如くハお前ニの如く  
古語ニの如くハお前ニの如くハお前ニの如く

一 相手 我ニ對スル向ノ人ヲアヒテト云俗ニハ相手  
ト書ニの本字ハ敵ノ字ニ敵ト云ハ合戦ノ敵ニ限ラヌ  
詞ニの古語ニハアヒテノ更ラカタキト云小兒ノ遊ヒ

一 相手ヲアソビガタキト云類ニの源氏ニ見

一 支證 物ノ證拠ヲ古書ニ支證ニ備ラナドガキタル  
アリ是俗語ニの本ハタトヘハ所領ノ地ナドヲ爭論シ  
テ奉行所ニ出ル時其相手ノ訴ノ赴ル支スルガ  
為ニ古キ證文ナトヲ支證ト云タルカ一博シテ訴ニ  
非ル更ニモ證拠ヲ支證ト云習ハセリ俗語ニハ如此  
ノ博用間ニアリ

一 和諛 京大坂ナドノ詞ニハリニホント云古書ニモ  
和諛ト云詞アリ本ハ西人ノ間ヲ他人ニ諛言シテ相手  
ト不知ニナリタル時ニ我実情ヲ述ヘテ人ノ諛言ナ  
ル由ヲ明ニニ云ホドキテ相手ニ和諛スルヲ和諛ト云  
ヒタルガ一博シテ諛言ニテナキ更モ更ラ明ニニ云ホ

トクノヲ和諺ト云習ハセルニ是又俗語ノ博用ニ如  
此博用傍通ヲ悟ラスシテ唯字面ニ泥ミテハ昔ノ俗  
語ニ通達シカタシ

一ケバヤ 源平盛衰記卷十七石橋合戦ノ条此ニ云ふ  
うぢ出づれば依敷ハ負ガ装束けをわふるあきふよ  
のしとのまゝ ちくケハハ花巻るるとみ今此  
詞ケケハハシキとちふ同ケハ氣ニケシキヲ云  
しヤハエしエト音お也しエハ堂ノまじ花の夕をえ  
るぞお小よあらし同く包らるるも云包らる  
るしきし

一 手鼓 壹岐判官知康手鼓ノ上手ナリニ故鼓判官ト云  
名ヲ得タリ東鑑源平盛衰記平家物語ホニ見エタリ

手鼓トハ今ノ小鼓ナルヘシ鼓トハ革ヲ張リテ鳴ス  
物ノ惣名ナリ太鼓羯鼓ホハ撥ヲ以テ弁ニ小鼓ハ手  
ヲ以テ打ツユヘ手鼓ト云ナルヘシ盛衰記ニ知康ハ  
究竟ノシテ、イノ上手ニテ鼓判官ト異名ヨビケル  
云クシテ、イト云ハ鼓打ツ曲ニシテ、イト云ト云  
ルナルヘシ

一 鷹飼犬牽帽子 鷹飼錦帽子ヲ著ル事西宮記江家次  
才等ニ見タリ犬牽ノ帽子ハ定家ハ鷹三百歌ニ狩人  
のかそほしそ山しそえつそえあきし松皮まつそきふ  
小犬飼あしそ松皮あしそとらし并たしそハ石定家  
不知てあきとあし鷹飼犬牽帽子の御ハあきあき  
の松よそそあし別の古画しそあしそあしあし

元押解ふ不細る也  
（不押解ふ不細る也）

一 什物ヲ宝物ト心得ルハ俗ノ誤ニ寺ノ什物ト云アリ  
誤未ルナルヘレ史記ノ什器ノ注ニ索隱ニ曰什数ニ  
人家常ニ用ルノ器非一故以什為數漢書ノ注ニ師古  
曰古者師行ニ五為什食器之數必共之故曰什物什具  
今通為生々之具為什物亦猶從軍作役若干人為火共  
蓄調度禪韻會古軍兵人数組合ノ法ニ五人ヲ一組ニ  
レテ是ヲ名付テ伍ト云此内一人組頭有リ是ヲ伍長  
ト云右ノ伍人組ヲ二組合セテ都合十人組トレテ是  
ヲ名付テ什ト云是ニ頭一人付テ伍ノ二組ヲ支配オ  
セル其頭ヲ什長ト云什ヨリ以上ノ組合千五人モ皆  
此法ニ准スルニオテ陣中ニテ八十人一火トテ十人

ニ 竈カマド一ツ立テ鍋モ釜モ其外諸道具ヲ十人相合テツ  
カフニ一人別クニツカハス什ノ一組十人カ相合ニ  
ワカフ故其道具ヲ什物ト云ニ什物トハ一人ノ物ニ  
非ルヲ云ニコレニ准シテ仙寺ニ前ヨリレテ其寺  
ニ付ケ渡リニテ前任ノ僧ヨリ後任ノ僧ヘ譲リ渡ス  
諸道具ハ當任ノ僧一人ノ物ニ非ス故ニ什物ト云ニ  
其什物ノ中ニハ寺ニ付タル室物モアルヲ什物ト称  
シテ人ニ見スル故俗ニハ什物ト云ニ同事ト思ヒ誤  
ルナリ  
一 交割物アウカワモノ俗ニ室物ノ更ヲカウカワモノト云交割ト  
云ハ仙寺ノ什物ノ更ナリ棠陰比更ニ見エタリ是モ  
俗ニ寺ノ什物ヲ室物ト云フト思ヒ誤ルニ依テ交割

一 八道行成 和名抄雅藝具ニ八道行成讀夜佐須賀利  
 トアリ今モ田舎ニテハスガリト云ヤサヲ略レテ云  
 ニ江戸ニテハ十六ムサシト云十六ハ子馬ノ数十六  
 アリ親馬ヲ除テ云ムサシハ馬指ニトムト音通  
 ニ十六ノ馬ヲ指テト云一ニ將基ヲサスト云ニ同シ  
 將基ノコ馬モ馬ト云ハ古キ詞ニ又ヤサスガリト云  
 ハヤススガリナルヘシヤスハヤスシノ略語ニテハ  
 ノ道スレヲ盤ニ画リシスガリハ子馬ヲ以テ親馬ニ  
 スガリ廻ルシスガルト云ハ繩ノ字ニテ繩ヲ付テ離  
 レホルヲスガルト云是親馬ヲ追テ離ホルノ意ニテ  
 スカリト云ニ

一文書一通 文書ノ数ヲ一通ニ通ト云ハ俗語ニ非ス  
 一字彙ニ書ノ首末全曰通漢崔寔論ニ一通置坐側  
 一 正月宝舟繪 古代ノ書ニ宝舟繪ヲ正月枕ノ下ニ敷  
 一 所見ナシ京都將軍ノ比ハ既ニ此更アリキ決巽阿  
 將軍家文洞祿比覺公ヨ云貞孝ノ御調進節分御和法  
 大將軍家文洞祿比覺公ヨ云貞孝ノ御調進節分御和法  
 不<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>亦<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>上京小川府屋ニ衣<sup>レ</sup>去<sup>レ</sup>次又<sup>レ</sup>更<sup>レ</sup>後移御法  
 帳中<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>峠石と<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>御被<sup>レ</sup>友人<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>持<sup>レ</sup>友人<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>持<sup>レ</sup>友人<sup>レ</sup>  
 其<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>又<sup>レ</sup>その<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>公<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>極<sup>レ</sup>光<sup>レ</sup>源<sup>レ</sup>傳<sup>レ</sup>殿<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>某<sup>レ</sup>福<sup>レ</sup>山<sup>レ</sup>祐  
 五<sup>レ</sup>帝<sup>レ</sup>時<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>和<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>鑑<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>公<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>極<sup>レ</sup>光<sup>レ</sup>源<sup>レ</sup>傳<sup>レ</sup>殿<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>某<sup>レ</sup>福<sup>レ</sup>山<sup>レ</sup>祐  
 老<sup>レ</sup>多<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>如<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>ニ<sup>レ</sup>傳<sup>レ</sup>貞<sup>レ</sup>孝<sup>レ</sup>阿<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>名<sup>レ</sup>如<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>  
 以<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>ニ<sup>レ</sup>公<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>極<sup>レ</sup>光<sup>レ</sup>源<sup>レ</sup>傳<sup>レ</sup>殿<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>某<sup>レ</sup>福<sup>レ</sup>山<sup>レ</sup>祐  
 不<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>ニ<sup>レ</sup>公<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>極<sup>レ</sup>光<sup>レ</sup>源<sup>レ</sup>傳<sup>レ</sup>殿<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>某<sup>レ</sup>福<sup>レ</sup>山<sup>レ</sup>祐

その調を成すは各分の内何公にては乃其も茶の中舟  
あはして修り福山鑑等持て是れとのり彼も二条春  
日乃有る由の久しとて少あと公の海を分りあまお取  
添むく鑑あはされとて調すのゆいしとて右に文  
とるく小若ハ名かゝ秋家おの鑑と田いゝゆゝとる  
貞孝ハ伊勢伊勢も貞孝ハお家家の海を破し貞  
孝ハお家舟の鑑と献すし貞孝ハ予々先世に道  
あはし書りし

- 一 禰禰 衣服令義解曰一片當背一片當胸故曰禰禰加
- 一 競馬ノ如繪キナドニナリ
- 一 ジヨナイ 俗語ニ更ヲ粗略ニセホルヲジヨナイニ
- 一 セズト云此ジヨナイト云文字詳ナラズ俗ニハ如在

ノ二字ヲ用レトモ非之如在ノ二字ハ論語ニ祭如在  
祭神如神在トアリ是ヨリ出タリ然レ氏此語ハ神ヲ  
祭ル時ニ神躰ハ其場ニ在ス目ニハ見ヘ子トモ其場  
ニ神躰ノ目ニ見ヘテ在ガ如ク尊ヒ敬テ祭ト云フ  
ナレハ如在ノ二字ハ俗語ノシヨナイニハ當ラズ不  
可用按スルニ俗語ノシヨナイニハ常裁ノ二字ヲ可  
用裁ハ字彙ニ裁度ニトアリ裁度トハ更ヲ取ハカラ  
フ更ニテ裁判裁断裁許ナト、公モ皆更ヲ取ハカラ  
フ更ニ裁ノ字ヲ用フルニ常裁ト云ハタゞヨノワ子  
ノ取ハカラヒニテ格別ニ身ヲ入テ取ハカラヒニテ  
格別ニ身ヲ入テ取ハカラヒヲセヌニ是粗略ナル取  
ハカラヒニ故ニ更ヲ粗略ニスルヲ常裁ニスルト云



一 都鄙考 媛よりふそと以て治世と習を云はれぬと  
とらふ家臣の風俗に凡く及ぶ者なきよし其因を  
世の風俗に於て習よりなきハ聖人の教ふ所の如  
き理學を好む人の家臣と云ひ世の偏をあり  
理學を好む人にて我を識と云ふる所せしめ  
偏を云ふ

一 習のせき法 物に習ふを習の習とせき法と云ハ  
習をつぎて法と云ふ又云習のせき法と云はれ  
はふと物に習ふは法の習と云はれ習の習と云  
は習法に習ふは法の習と云はれ習の習と云は  
は習の習と云はれ習の習と云はれ習の習と云  
は習の習と云はれ習の習と云はれ習の習と云

一 一ノフト云詞三品 人日と云ふは又云のひてのよきと

一 一ノフトの字に若と云ふは又云と云ふのよきと云はれ  
のよきと云ふは又云と云ふのよきと云ふのよきと  
はのよきと云ふは又云と云ふのよきと云ふのよきと  
のよきと云ふは又云と云ふのよきと云ふのよきと

一 守宮神 養花物流花山の老を花山守宮中と云ふの  
出まひしよしと云ふは又云と云ふのよきと云ふのよきと  
はのよきと云ふは又云と云ふのよきと云ふのよきと  
のよきと云ふは又云と云ふのよきと云ふのよきと  
はのよきと云ふは又云と云ふのよきと云ふのよきと





一上様 太平記卷七先帝船上臨幸ノ条ニ上様ハ未知

召<sup>コ</sup>ハヤ<sup>ク</sup>云<sup>フ</sup>

一光源氏大将 三條右大臣左大将定方公美男ノ世ニ  
光源氏ト称セリ延喜十三年三月十三日薨<sup>シ</sup> 称<sup>ス</sup>号<sup>シ</sup>録<sup>シ</sup>紫

式部が光源氏物語ハ此称ヲ取テ借リ用ヒレシ

一天孫 博物志云泰山一曰天孫言為天帝之孫也本朝

ニテハ天子ヲ天孫ト称ス天神ノ子孫ニアノミト

ハアメリカ<sup>ノ</sup>カ<sup>ニ</sup>ノ御孫ノ畧語

一白師黒師 基高郷色白時人稱白師李仲郷色黒時人

稱黒師師者官号大宰師也 称<sup>ス</sup>号<sup>シ</sup>禄

一經史古讀俗讀 假令論語雍也篇日子謂仲弓曰犁牛

之<sup>レ</sup>子驛且角雖欲勿用山川其舍諸ト云フ文ヲ犁牛之

子驛ニテカワ角アラハ用フルナカラント欲スト

雖トモ山川其舍ニヤトヨムハ俗讀ニ驛ニテ一ノ角

アラハ用ルナカラシク欲スト雖モ山川其レステ

メヤトヨムハ道春点ニテ古讀ニ道春ハ業ヲ惺窩先

生ヨリ受ラレタリ惺窩ハ公家ノ人ニ藤原家<sup>ノ</sup>子

ハ孫ニ代惺窩ノ讀ハ古ノ大學寮ノ讀ヲ傳ヘ受ラレシ

ヲ以テ道春ニ授ラレシナルヘシナレハ其讀モ古雅

今時ハ其讀迷<sup>レ</sup>遠<sup>ク</sup>ニトテ改テ俗讀ニスル人アリ讀

雅俗ハ文義ニアツカラヌナレ氏俗讀ハ賤ク聞ユ

古雅ナルコソ文道ニハヨケレ又詩經文選十字文ナ

ト音訓ヲ一度ニ并ヘ讀スルナモ古之大學寮ニテ教

授ノ法ナルヘシ今時ハ如此ノ故実ハ廢レテ唯唐人

ノ真似ダニスレハヨキトニナレリ何ト讀タリ共文  
義タニ違カレハヨレト云フ人アリ我國ヲ怪シムル  
学者ハオモアルヘシ

一 交野 是ヲカタノトヨムハ交ノ字カタニトヨムヲ  
畧セルニちまりき然クハ不社と云フて未の松山  
波ルゴトトハ云分のつゝこハ交の字ありつゝみ  
ハ是も波と云ふものと云ふりたのちハ神と波と  
交るし

一 磨ナブリ 近津龍山公磨百そのはよ磨のひらと磨  
ちあふと云く定流の磨百そのふら名いきり  
すす磨ちあふ磨ふつひらとぞるる  
わち又ふらと云ふれえとふらと云く磨とハ

つひらと云ふと磨と云ふと或ハ皆ハ何のせりと音  
と云うせてせつる解と云うひらと專解と云てまは  
のぬるやハ磨ちあふと云ふハ磨のひらと云ふハ  
まやちり定流の二百その流千長と磨ちあふ經  
とひらと云ふハ流千ハ流と又流流馬ハひらと  
りハ磨ハちあふと云ふハ磨ハ流と古出ハ磨ハ  
ちあふと云ふハ磨ハ磨と云ふハ磨ハ磨と云ふ  
がらと云ふハ磨ハ磨と云ふハ磨ハ磨と云ふハ  
めて花の才と楊枝のこくサむきと云ふハ磨ハ  
きと云ふと菊瓶と云ふと磨ハ磨のぬと云ふと  
云ふハ磨のぬ

一 無乃字寧ノ字 經傳ニ無乃ノ二字モ寧ノ字モ共ニ

ムシロト訓ヲ付タリムシロト云詞ハ日本記并万葉  
集古今集ホニモ見ユス是レ古ノ大学寮ノ博士家ノ  
古語ナルヘシカレモムシロト云訓ノ意義ハ何故ト  
云更詳ナラス。按無乃ハ俗語ニ何ノ彼云フハ十イ  
ト云詞ニ當ルニ寧ハ論語朱熹ノ注ニ願辭トアリ俗  
語ニ何トセヨカレ未レカレクレヨカレノ類ノカレ  
ト云詞ニ當ルニ

一蓋字 蓋ケダシト訓スルハ氣出シナレハ俗語ニ用  
ルニハケタシノ訓ニテヨシ又物更ヲ推量シテ云フ  
所ニ蓋ノ字ヲ用ルハオホカタト云語ニ當ルニ俗語  
ニオホカタカウテアラフト云フ詞ノオホカタハ蓋  
ノ字ニ當ルナリオホカタノ意ニ用タル蓋ノ字ニケ

タレノ訓ハワセシオホカタトヨムヘシ万葉ニ蓋ノ  
詞アリ

一長歌短歌 古今集ノ部立ノ標題ニハ短歌ト記シテ  
其歌ノ更昏ニハナリトアリ真字ニテハ短歌ト  
昏キ即其短歌ノ更ヲ假名ニテナリト記セル  
不審ニ是ニ付テ様々ノ僻説アリ貫之ハ右ノ如クナ  
ル更ヲハ必不可書貫之ハ真字ニテモ長歌ト昏シナ  
ルヘシ然ルニ後人彼ノ僻説ヲ好ム人短歌ト昏改メ  
テ其僻説ヲ實ニセントテノ所為ナルヘシ藤原濱成  
ノ歌經標式喜撰ノ和歌作式ホニハ幾句モ長ク連子  
タルヲ長歌ト記シタリ又濱成式ニ三十一字ノ哥ヲ  
短哥ト記セリ其ニ是正直ナル名称ニテ秘更モ口傳

モナシ又古今集俳諧歌ノ俳ノ字モ誅ノ字ニ記シタ  
リ是モ貫之ハ如此昏リヘカラス後人ノ昏誤ニ貫之  
癸覽ノ本ニ漫ナルヲ昏ナルヘシ定家コノ貞應本喜  
禄本トテアリ度ニ古今ヲ写シ改メラレタリ今專定  
家ノ本ヲ尊信スル変ニ成リ右之書改メ昏誤ホハ  
定家ノ所為ナラニ歎定家ヲ尊崇ル餘リニ其誤ヲ改  
メスレテ却テ横サニニ僻説ヲ作テ秘傳奧義トスル  
ナルヘシ如此ノ変予ハ信服セス

- 一 子細 子ノ字ヲ用フルハ俗書ニ仔細ト昏リヘシ仔
- 一 玉篇ニ別之切字彙ニ任トアリ任ハ堪ニ仔細ハ
- 細ナルニ堪タリト云フニテ至テ細ナルヲ云委細ト
- 云ニ同シ俗語ニ事理ノ変トシテ其子細ハ如此ナド

ト云フハ歌ナリ是其事理ノ仔細ナルハト云意ナル  
ガ仔細ニ看ルナド云ハ物ヲ委細ニ看ルヲ云ニ  
一 うゝゝ うゝゝと云ふよと云ふと抄ぬハ水の泡の  
うゝゝと云又詞ハ寧ハハの字乃云と云  
梅うたゝゝハうゝゝと云ふと抄ぬハ水の泡の  
と云ふふ書けぞ空瓶ニ水の泡ハ丸く玉の如の瓶  
ハわれとと中ハ空なりこれヲたとへて空を以て空  
と云ふよとハ詞ハしと云ふと云ふと云ふハ伊勢  
と云ふつゝたぐんたぐん水の泡のうゝゝと云ふと云  
まゝえやと云ふハ魚の如くて産み泡ハ丸く玉の如  
と云ふと云ふハ魚の泡のうゝゝと云ふと云ふハ  
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ



ききし多し 倭ふあどけるしとらふほくわの詞後代  
ふれがとまことおのぬおるふはとまをまきまをいして  
みだりふそおのそをり候て世を以てはとて  
たふゆ多しそおと由てあふそおのほとらふゆ  
りうさかふゆりるゆじ又後代ふおのつみまのたふ  
しつと食の味とかいさきまゆりるまゆりる詞の  
て節ゆきゆきとさふけしとけりるまゆり  
一オモレヤル オレヤル キヤアル 是田舎人の詞  
しオモレヤルハ御申アルノ約語しオレヤルハ仰せ  
アルノ約語しギヤアルハ御意アルノ約語し約語ト  
云フアルヲ知ヘシ  
一十ヨホイチ 下賤ノ者博奕ヲキワフヲ十ヨホイチ

一十云ハ樗蒲ウチノ訛し雙六ヲキワフ樗蒲ノ戯ト云  
し故ニ古是ヲ禁制セラレシ  
一掛鏡為神躰 諸神祠ニ鏡ヲ掛テ神躰トスルハ八  
咫鏡ヲ以テ伊勢太神ノ神体トスルヲ学ヒタルハ  
咫鏡ハ天照太神ノ常ニ持給ヒレ鏡ナルヲ御孫瓊々  
杵尊ニ譲リ授ケ給ヒ此鏡ヲ見ルヲ吾ヲ見ルカ如ク  
ヒヨト宣ヒレ故ニ其鏡ヲ太神ノ神体ト崇メ祭ル  
是其故アルハ諸祠ノ神体トスル鏡ハ其神ノ常ニ  
持至ヒレ物ニモアラズ此鏡ヲ見ルヲ吾ヲ見ルカ如  
クヒヨトノ神語モトキニ伊勢ノ神宮ノニ子ヲレテ  
鏡ヲ以テ惣ニテ諸祠ノ神体トスルハ神徳ハ鏡ノ  
一圓相ニシテ稜カナク光明清浄ニテ一點ノ曇リナク

万民ヲ照シ守リ玉フノ表相ニ拜礼スル人其鏡ニ向  
ヘハ其人ノ形映ル是則神ハ汝カ身ニ心正直清浄ニ  
スヘシトノ教之為ニ何レノ神ノ神躰ニモ鏡ヲ用ル  
シト云ヘリ 真丈云此或説ハ仏法ノ説ニ宋儒ノ心  
学ヲ附會シテ理説ヲ述タルニ上古ニ如此ムワカシ  
キ説ハ十ニ宋儒ノ心学理学ハ鎌倉ノ北条カ末ツカ  
タヨリハヤリ出シシオレハ其以前ハ右ノ如クナル  
ムワカシキ説ハ十ニ天照太神ハ此鏡ヲ見ルト吾ヲ  
見ルカ如クセヨトノタニヒシヨリ外ニムワカシキ  
奥深キ理説ヲハ宣ハサリシニムワカシキナキハ  
神ノ心ニ神ノ受ヲ奥深クムワカシキ説ヲ述タルハ  
皆後代ノ作リ事ニ用ユルナカレ

一立幣為神躰

立テ神体トスルアリ是モ亦當ラヌ又受ニ按ニ漢土ハ  
云ニ不及万国共ニ各風俗ハ異ナレ其国ニ上古  
ヨリ傳ハリタル礼儀アルモノニ我國上古神代ニハ  
人ニ謁見スルニハ必又オヲ持向ヲ進物トス是上古  
ノ礼ニ其又オハ杜仲ノアニ皮又ハ麻苧ホヲ串ノ頭  
ニ狭ニタル物ニ是何ノ用ニモ立サル物ナレ是ヲ  
礼物トスルト上古ノ風俗ニ後ニ紙ヲ漉キ出シテヨ  
リ紙ヲモ切製テ串ニ狭ニテモ用ルニ此又オヲ用ユ  
ルト漢土ニテ謁見ニ用ル進物ト云ニ當ル故又オニ  
幣帛ノニ字ヲモ當テ用ルニ右ニ云如ク又オハ礼物  
ナル故後代ニ至リテモ神ヲ拜スル人ハ上古ノ礼物



ラ神ニ奉テ礼ヲ行ヒテ手ヲ拍モ上古ノ礼ナルユヘ神  
ニ向テ手ヲ拍ツ是又上古ノ礼ヲ行フニ右ノ如ク又  
サハ礼物ニ神躰トスヘキ物ニハ非ス又玄白ニギテ  
ト云ハ白又サニテ杜仲麻ホノ尸ニ皮ノ白キ所ヲ用  
ユ青ニギテト云ハ白又サニテ杜仲麻ホノ鹿皮ノ  
青キ所ヲ用ルニ礼物ニ精粗ノ差別アリシナルヘシ  
ニキテハ即又サニニキテト云ハ謁見ニ是ヲ持テ手  
ヲニギハス意ナルヘシ又ユウト云モ又サノ下ナリ  
ユウシテト云ハシテハ垂レカカル下ニ又ユウヲ木  
綿ト書クハ杜仲ノ一名ヲ木綿ト云杜仲ヲ折レハ白  
糸ノ如クナル物アリ尸ニ皮ニ故ニ木綿ト云杜仲麻  
等ノ尸ニ皮モ木綿ノ類ナレハ又サニハ通シテユフ

ト云ニ又又サヲ持テ左右左ト振ハ上古ノ礼ナルヘ  
シ謹上再拜云ト唱ルハ後代ノ下ナルヘシキジヤ  
ウサイハイト云ハ字音ニ上古ハ漢字ナレサレハ字  
音ヲ唱ル下ハ上古ニハナキ又ト知ルヘシ又今世神  
社ヘ参リタル人ニ神主カ幣ヲ持出テイタツカスル  
ハ心得ヌ下ニ幣ハ神主ノ方ヨリ持出テイタツカスル  
物ニハ非ス神拜スル人ノ方ヨリ持行テ神ニ奉ル物  
ニハ非ス

六の旅々めいし取めへんし向山おまふ乃綿神のまじく  
ト云くニテ考ヘシ

一ガキヒタシ 白柿<sup>ハシ</sup>串<sup>ハシ</sup>カキ<sup>ハシ</sup>類<sup>ハシ</sup>ヲ刺<sup>ハシ</sup>ニテ酒浸シタルニ  
菓子<sup>ハシ</sup>之昔ハ砂糖ナクテ甘キ物ハ甘葛<sup>ハシ</sup>煎シテ入タル

物又ハ柿ナトヲ用ニ今モ堂上衆鞠ノ會ナトニハカ  
キヒタシノ供スルニ萩原宗古説深淵物見詰ニカキ

一天下治本乱本 貞丈曰治本在上惠下富也富别人情

正直而孝悌忠信礼义廉耻行矣乱本在上虐下贫也贫

别人情邪曲而贫諍欺賂奪盗誦行矣富世多善人百代

何違予言哉又曰富世以德行人为贤者以谋利人为贼  
者也贫世以谋利人为贤者以德行人为愚者又曰富世

万民於君必信服贫世万民於君必伪服信服感恩也伪  
服恐威也

一惣海鞍 古作ニモ惣海ハ少キ故人多クハ見知ラス  
惣海ト云ハ無海ト表裏ノ前後輪共ニ山形ノ上ヨリ

鰯口ノ際ニテ浅ク窪ク歇ニ磯ナシ雉股ヨリ凡先ニ

至リテハ上ノ方ヨリ少深ク彫ニ輪ノ内ノ方ハ常ノ  
如ク平ニ惣海ハ輪少薄クナルユヘ木目ノ宜キヲ撰

一あすて 古歌ハあすて小あをぬ又りてあはるごとくあ  
す鴨長明奥のふあすてあはあつまとあけあはり

るあすあをぬいそととくく比ノ邪あすてハ麻の紫  
人のあふ似たりと萩のあはりと云ふあすて又あ

川次郎百あすあはあすてと云ふあすのあはのあの上  
あすてこあをぬいきてこもとれけあすてハあふり

らとあ麻津こあをぬいきてこもとれけあすてハあふり  
てとあああすりけあああハ実あふとあすて麻

あふとあああ

一 神道用八数 荷田在滿カ祠詞考ニハハ弥ハノ訓  
 ヲ借用ニト云ヘリ此説在明ノ八ヲトワノ字添ルハ  
 惡シ唯ヤト云ヘシ八目鏡モヤノ鏡ト云ヘシ弥目ノ  
 鏡ト云フニテ唯目ヲ多ク開キタルヲ云フニハ数ニ  
 抱ルト勿或説ニ神道ニハヲ用ルトハ始ノ一ト終ノ  
 十ヲ除キ去レハ残りハワアリ始モナク終モナク無  
 窮ナルヲ貴フニト云ヘリ此説ハ理過テ謎ヲ解クガ  
 コトニ上古ニ如此ムワカシキ夏ハナシ神代ノ風ニ  
 非スハハ弥ハ借訓ト云フ甚古風叶ヘリ八雲八重垣  
 八百万等ノ八ヲ弥ノ字トナシテ見レハ意味ハノ字  
 ヲリモ勝レリ又中臣坂ノ小男鹿乃ハ御耳モハワノ  
 ニハアラ又是モ借訓ニテ弥角ト云フハ鹿ハ角アリ

振立立ハ譬喻ニハ坂瓊ノ曲玉ト云モ弥清光圓玉ノ  
 略博語ニハト持音相通弥清光圓珠  
 一 講頌 和哥會ニアリ講師ノ後ニ列居シテ講師ニ就  
 テ同音ニ諱フ役人ニ近代年中行夏正月御會始ノ奈  
 ニ去次祭声着文臺右襲次講頌輩群居後方着了安座  
 詠進之公卿雲客自御眼路至議定所迄数多群居聽聞  
 之次講師取懷紙置右方取懷紙一枚越置文臺上御前  
 宛次講師讀之一返自瑞作讀出名讀了次哥自二枚目  
 不讀瑞作讀名次讀哥至御製者新讀瑞作講了祭声人  
 祭之講頌同就也云々  
 一 鈴舟 日本記ニ仁德天皇幸大津侍皇后之船而歌曰  
 那耳波譬苦須儒赴泥苦羅齊於明滿赴泥苦礼 祝日

本記ニ須儒赴泥鈴舟ノ私記曰師説以鈴餅舟也。源  
氏之の老翁云々

一 豈ノ詞 日本記仁徳天皇ノ皇后ノ答哥ニ阿瑯アヲ豫ヨ區ク

望阿羅儒 釈日本紀ニ阿瑯也

一 修羅車 節用集ニ修羅注云引大木材木也トアリ軍

蓋考卷六類六火大友カ家ノ夏ニルセル記ニ天正四年ノ

頃宗麟入道カ領セル肥後国ニ南蕃ヨリ大石火矢未

レルヲ入道ヤカテ彼国ヨリ修羅ヲ以テ豊後国臼杵

ノ庄丹生ノ島迄引寄セタリ云々 橘村長高カ室町殿

日記卷二十小天狗ノ篇中大仙殿造営ノ夏ヲ去ヘル

章ニ去石垣ノ大石ヲ鹿カ谷ヨリ引レケルニ蒲生飛

騮守承リテ六墨敷ノ大石ヲ引ニ三千九百人カ三テ

引リト聞ユ楠木松ノ虹染ヲ以テ修羅車ヲ造リ是ニ  
引ノセ道筋ニハ凡太ヲ敷テ其上ニアラノヲニカヤ  
テヌメリヲ以テヤリニケル云々 今世地車ト云物ノ  
大ナル歟

一字音与和訓相似 气字音キ和訓ケ 蟬字音セニ和  
訓セシ

一字音与和訓相同 菊音キク訓キク 蝶音チヤウ訓  
テフ 死音シ訓シ

一 博音為訓 蘭音ラン訓ラニ芭蕉ハセフ訓ハセヲ  
紫苑音シヲニ訓シヲニ 桔梗音キワキヤウ訓キケ

カウ比類多シ

一 吉田家神道 吉田家ハト部氏ニテ其始祖天兒屋命

十二世ノ孫跨耳命ニ遙後兼治ト云人有リ其嫡子兼  
英其次子兼徳ト云兼従家号ヲ萩原ト称シテ両家ト  
成ル柳吉田家ノ神道中頃ヨリ神仙両部習合トナル  
リ是レ其家傳ヲ取失テ仙法ヲ取交タルニ萩原兼従  
ノ頃ヨリカ改テ仙法ヲ交ス唯一ノ神道トナル其後  
神代卷中臣坂等大極陰陽ノ消長五行ノ相生相尅ノ  
理ヲ以テ説キ成セリ是ヲ理学ノ神道ト云是漢土宋  
朝ニ始リシ理学ヲ以テ本トシテ造作シタル物ニ宋  
朝本朝ニテハ後鳥羽院ノ御代ノ比ニ当ルヘシ宋ノ  
理学ノ本朝ニ渡リ来リシハ鎌倉北条ノ季世ノ比ニ  
ルヘシ夫ヨリ以前ハ理学ナシ況ヤ神代ニ理学ナキ  
下ハ云ニ及ナルニ然ルニ理学ノ神道ト称シテ神代

卷ノ本文ヲハ曲言ニト云テ様々ノ理ヲ附會シテ謎  
ヲトク如ク説キナスニ秘傳口決多シ夫日本紀ノ神  
代卷ハ国史ナリ謎本ニハ非ス何ノ曲言ヲ用ニヤ神  
代上古ノ風俗ハ万事淡ク易ラカニテ巧ニムワカシ  
キヲハナシト見ユ且神代卷ハ諸家ノ舊記ヲ集メテ  
諸説異同アリテ孰レカ実孰カ虚トモ決定シカクキ  
ニ依テ一書曰ト云テ諸説ヲ其ニニ載テ舍人親王  
一言モ私意ヲ加エス記シタニヘリオレハ一昏ノ説  
ノ中ニハ実モアルヘシ虚モアルヘシ舍人ノ時代ス  
テ虚实弁ヘ知難カリシナリ况ヤ後代ヲヤサレハ神  
代ノ夏ハ明ナラス尺本昏ノニニテ文ニ随テ義ヲ  
説ヨリ外ハナシシ理モナキ多シ強テ別ニ理ヲ造テ

幸注附會スヘカラス神代ニ文字ナシ後代文字渡リ  
シ後ニ書シテハ諸説區々ニ神代ノ卷ハ国史ナル  
ヲ史トセスシテ天照太神ノ人倫ノ道ヲ教ヘ天下ヲ  
治ル法ヲ傳ヘ給フ書シトシテ神道ト云一道ノ本経  
ニ立ニト欲シタル故其趣ニ説成オニトテ神代卷ノ  
本文ヲ謎ノ如クシ仏記ノ譬喩ノ如クシテ理説ヲ以  
テ曲テ説リユヘムワカシク成テ其曲ケヤウニ秘傳  
口訣ナトモ出来タルニ類類書ニ如此心任セア一変スレ  
承ニ神道ハ證ヲ相吉田家ノ神道本ハ神仏西部習  
合ノ神道ニ後ニ改テ唯一ノ神道トナル其唯一モ理  
学神道ナレハ神儒西部習合ノ神道ニ如此ナルヲ神  
代ヨリ相承ニ乖カル證ニ後代ノ造更ニモシ神代ヨ

リノ正傳テアラハ外国ノ儒仏ノ西道ヲ借り雜ル  
ハ有ヘカラス神代卷ノが言々々々神代卷ノニ  
一 理学神道 萩原兼從朝臣門弟吉川推足傳紀曰紀伊  
巫相頼宣卿問云社人神ヲ祭ノ所作ヲ行フヲ神道ト  
云リシカアレハ神道ハ所作ヲ本トスルニヤ惟足答  
テ云神ヲ祭ル所作ヲ行フヲハ社人ノ神道ト申シ侍  
リ是ヲ行法ノ神道ト申シ侍シ頌書行法終法詞ト  
天下ヲ治ルヲハ理学ノ神道ト申シ侍ル更ニ行法ヲ  
用ルヲ侍ラス理学ノ本ハ国天下ヲ治ル所ニシテ所  
作ハ武藝ニナレハ天兒屋命ノ御子孫神之道ヲ附屬  
シ代々政務ニ預リ四海ヲ治メラレ侍ル云々○貞丈  
云此説トルニ足ラス造言ニ



則其帝王德其帝火德之類以其生日之支幹稱之  
土德火德ホト云丁丑行家道家ノ詞ナルヘシ無用ノ  
夏ニ

一上古之夏 漢土ニテハ黄帝ノ時始テ文字ヲ作シリ  
黄帝以前ハ書籍ナシ故ニ上古ノ夏ハ唯古老ノ談リ  
傳ヘ聞傳ヘノミニテタシカニ分明ナル丁ハナシ談  
リ傳ヘ聞傳ヘハ年代ヲ經ルニ隨テ談リ違ヘ聞違覺  
違ヘ有ルニ依テ説區々相違アリテ疑ハシキ事モア  
リ怪シキ夏モアルニ夫ヲ正シク明メント欲スレ氏  
文字ナカリシ時ノ夏ハ書籍ニ記シタル物ナレハ  
セシカタナリテ古老ノ談リ傳ヘ聞傳傳ニ後ノ人各  
籍ニ載テ後代ニ遺シタルニ漢土ノ文字早ク出来シ

国スラ如此況ヤ我國十六代應神天皇ノ十四年迄ハ  
文字ナカリケレハ其以前ノ夏ハ分明ニ知レス只古  
老ノ談リ傳ヘ聞傳ヘノミナルヲ文字渡リテ後文字  
ノハタラキヲ習得タル時代ニ至テ漸ク古老ノ談リ  
傳ヘ聞傳ヘヲ記シタル書諸家ニ出未タリ然レ氏談  
リ違覺ヘ違アルユヘ諸説區々ニテ同シカラス日本  
紀ニ一書曰ト去テ説クノ不同ヲ挙ラレタルハ是ニ  
然ルニ今世ノ神道者ト云葦神代ノ夏ヲ近年ノ夏ノ  
如ク我物ニシテ詳ニ明ニ説ント欲スルハ大愚ノ至  
リ其説聞クニ是ラス

一晋人著晉 晋ノ于宝搜神記陶淵明カ統搜神記張華  
カ博物志王子年カ拾遺記等奇怪妖妄ノ夏ヲ載タリ



又仙人方術ノ事ヲ云其世ニ如此事ヲ好ミシト見ユ  
漢土ノ書スラ然リ況ヤ我國神社仙寺ノ縁起野史俗  
談ヲヤ信用スルニ足ラス

一 翔風詩妓王歌 王子年拾遺記ニ石季倫カ愛妾翔風

ト云女寵衰テ退ラレテ怨ヲ懷テ作レル五言ノ詩曰

春華詎不美卒傷秋露時突桐還自低都退豈所期桂芳

徒自蠹失愛仕蛾眉坐見芳時止樵悴空自嗤此詩子家

物語ニ見タル妓王カ哥云云云云云云云云云云云云

野史の州何處カ秋ノ時多ク人及キト云云云云云云

云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

又云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云

